

SISTER ANGELA

シスターアンジェラ

常闇の王と聖なる乙女

空蝉
Utsusemi

表紙イラスト：秋月からす

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『シスターアンジェラ 常闇の王と聖なる乙女』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



SISTER ANGELA

シスターアンジェラ

常闇の王と聖なる乙女

空蝉

表紙 / 秋月からす

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

シスターアンジェラ

亡き父母の遺した孤児院兼教会を一人で切り盛りする、心優しいシスター。父に教わった武術と掌に刻まれた聖痕で、異形の者を退治する。

ハズベル

清らかな乙女が好物の淫魔。

つよし ゆき れいな 剛、優希、令菜

アンジェラの孤児院で生活する 3 人達。

「ほら、走るとまた転ぶわよー」

麗らかな平日の午後。聖ヘレナ孤児院の庭先にはかしましい■■■■たちの声と、それをやんわりと注意する柔らかな声とが響き渡っていた。

「わあつてるって。ほら、行くぞ優希っ」

三人の■■■■の先頭を駆けるのは、近藤剛こんどう。目上に対してぞんざいな口を利くが、反面誰に対しても臆せず、偏見を持たない。いがぐり頭を振りまかせ、絆創膏の張られた顔をにぱつと緩ませる。ヒーロー物の絵がプリントされた白地の半袖シャツに半ズボンといういでたちも相まって腕白小僧、という表現がまさにぴったりの子だ。

「まま、待ってよう」

振り向いた友人に、なぜか照れながら言葉を返した少年の名は、内山優希うちやま。どことなく線の細い伏し目がちな美少年は、首の辺りでおさげに結わえた長い黒髪と、洒落たポロシャツに汗を滴らせながら、剛の後を必死に追いかけていた。

かけっこの苦手な彼はいつも後ろを走るのだが、必ずと言ってもいいほど、気にかけた剛が時折立ち止まって待っている。

（本当に仲が良いのね。……ちよっぴり羨ましい、カナ？）

合衆国の外れにあつて、なぜか日本人の孤児ばかりが三人。これも数奇な運命の導きか、そんなことを思いながら。当孤児院たった一人の職員であるシスターアンジェラは、髪を

すつぽり覆い隠す黒フードを春風になびかせ、空を見上げていた。

「……ほんと、男の子って、馬鹿ばっか」

「こおら。だめよ、レディがそんな言葉を使つては」

そしてもう一人。隣の豊穣に実つたグラマラスボディを包む、黒基調のシスター服の袖を右手で引き。左手一本で辞書を器用にばらばらめくる、黒髪おかつぱがトレードマークの少女。

「……はい。ごめんなさい、シスター」

毒舌振りとは裏腹な素直さでシスターの碧眼をほころばせた、少女の名は山ノ瀬^{やまのせ}令菜。ゴシック調のシックなドレスを好んで着込み、夏でも四肢を日に晒さない肌は透き通るほどに白い。無口なことも相まって、座つていればお人形のようにも見えるのだが。以前、そう告げたところ、『シスターの方が綺麗です……』と、なぜか頬を赤らめて返されたこともある。さらには時々熱っぽい彼女の視線を背中やお尻に感じることもあるのだが、
(まさか、ね)

努めて考えないようにしている、シスターアンジェラであつた。

「あら？ 令菜ちゃん、また新しいご本を読んでのね」

駆ける男子二人から目を離さぬまま、脇に佇む少女と共に日陰に入り直して言葉を交わす。少女はおかつぱ髪を揺らして、まさに花が咲くように——満面の微笑みときらきら輝

く瞳でもって一回り年上の金髪美女を見上げてきた。

「今日は、これが三冊目なんです」

孤児院創設者でもあるアンジェラの父。早くに亡くなった彼の蔵書は小さな図書館と言えるほどの規模であるのだが、男子二人は寄りつかず、時々アンジェラが訪れてはお茶を楽しんだりもする他はもっぱら令菜が部屋の主となっていた。

本は読まれてこそ幸せなのだから――。

「……ん。にふう……」

思わず温かな気持ちの赴くまま読書家の少女の髪をなでてしまい。彼女がまるで猫のように頭を擦り寄せてくるのを見て、少し甘やかし過ぎかも、と苦笑する。

「おーい、アンジェラあ。令菜も来いよー！」

見れば、庭の端に植えられたイチヨウの木の下で、剛が元気な声を絞りだして手を振っていた。その隣に、木陰で幸せそうにまどろんでいる優希の姿も見える。

「……シスターを呼び捨てるなんて」

度を越した信望者である少女の憤慨に再び苦笑をこぼしつつ。

「四人分のお茶とお菓子。持って行ってあの木のところで休みましようか、令菜ちゃん」

微笑まれた少女は白い肌を真っ赤にし、うつむきながらコクンと返事。その細い黒髪をもう一度優しくなでてやりながら、笑顔のアンジェラはまぶしい青空を見上げた。

左右に臀部を割り開かれ、思わず尻穴がヒクリと蠢く。同時にパクリと開いた陰唇が、物欲しげに身悶え甘い蜜をまた漏らした。

（お、おかしいわっ、絶対……か、感じ、すぎるうう）

中指の腹で尻の谷間をスリスリと擦られる。それだけでビクリと背が反り返り、レースの純白ショーツに濃いシミがじゅわりと浮いた。まるで、じかに指で性器をまさぐられてゐるかのような、鮮明に伝わってくる指の刺激が愛しくて堪らない――。

異常に敏感になって己の身体の異変が、異形の能力によるものだとわかつてはいても、抵抗する気力が湧いてこない。それどころか、もっと強く甘い快樂に溶けてしまいたいとさえ願う自分が、恐ろしくも心地いい。

「お、お尻で感じるなんてっ、いや、だめですっ……ふ、不浄の穴です、のにいつ」

口先だけの反抗だと見破って、異形の男が微笑んだ。

「そうやって理性の殻に閉じこもる貴女は美しい……でも、私の前でだけは、卑しい牝に成り下がちなさい」

——づぷっ！

「んはっあああひいいいっ!! お、おしりっ、穴あああっ！」

男の指先が一突きで肛門の位置を探り当て、続いてグリグリと押し込んでくる。穴をほぐすように指腹で揉み込まれ、ひとりで肛門がヒクリヒクリと甘く震える。

（私が、卑しい牝……に？）

そんなこと、神に仕える者として絶対に許されることではない。何より自分には、姉と慕ってくれる■■■■■たちが立派な成人になるまで守り、育て上げる責任がある。こんなところで自分一人、快楽に酔い溺れていくわけにはゆかぬのに。

なのに、生まれてからずっと育んできた道徳や理性といった殻が、男の赤い瞳を見つめているだけで、霞の如く霧散してしまう。

「ここはどうです？ こうして、尻穴をホジホジと」

「んひうつ！ はっ、はひっ、痺れてえっ、お尻、ジンジンしてますうつ」

修道衣がシワくちやになるのも構わず、縦横無尽にまさぐる男の手と指に悦んで尻を押しつけてしまう。初めて体感する深い愉悅の痺れに、汗ばむ脚がガクガクと激しく震え、時折滑っては男の胸板に鼻先を押しつけてしまう。昂奮する牡の体臭を嗅がされて、とうとう自力で立つことも難しくなる。

「……素晴らしい。おかげで私のモノもこんなに……ね？」
ぐりッ……。

「ひ……！ か、硬い」

ハズベルが押しつけてきた腰の中心に、熱くて硬い、強張りのような物があつた。ドクドクと穿たれる脈が腰骨にまで伝わって、堪らなく腰の奥が疼く。牡の種を求めて、子宮

が夜泣きしている——直感的にそう理解できてしまう。心と身体がイヤらしく作り変えられてしまったようで、悪寒が奔る。と同時に、硬くしこり始めた乳首の奥で、ドクドクと高鳴る爛れた想いがあつたのもまた、事実だった。

「では、まずズボンを脱がしてくださいますか？ 貴女の、口で」

「っ……く、ち……で？ ひあんツツ！」

クイと男が腰を突き出した瞬間。湿った股間が修道衣とショーツごと抉れて擦れ、大量の快樂刺激が股座を灼く。男が背に回していた腕を引つ込めると、自然と聖女の身体は異形の足元に崩れ落ちた。

「っ……あひ、はあつ、あ……そ、そんな、こと……」

できません、と言ひ繕おうとした乙女の声を遮り。

「見たいのでしょうか。硬く屹立した男のモノを。貴女の身体に欲情して、卑しく膨らんだ私の、ペニス。……今宵のことは貴女と私。二人だけの秘密にしましょう」

秘密。他の誰にも知られない。それなら——。

普段のアンジェラなら絶対に揺らがぬ道徳観念が、もはや紙屑同然に脆弱な存在へと成り下がってしまったている。

「ひみ、っ……二人、だけの……」

二人だけ。そのひとことに、まるで初恋の少女が胸を焦がすのと同じに、ドキドキと高

鳴る乳肉を堪らずに両手で、むしるみたいに掻き抱き。

荒く乱れる息を吐きながら視線を上げ、男が真上から、愛玩動物を見るような目で見めていのに気づいた時。なけなしの理性は露と散った。

自然と右手が男の腰に抱きついていく。

「口で、ズボン中央のジッパーを引き下ろしなさい」

「ふあ、い……」

異形の言葉は絶対の強制力を持って聖女の蕩けた心に響き、もう二度と逆らえないのだと、頭の隅で理解させられる。

（だめっ、は、はしたないっ、主や、お父様の見てる前でできないいいっ）

信仰する神と、この地で眠りについて父の御魂みたまに見られている——身悶えながら吐き出した羞恥心は、ますます欲情を煽りたてただけで。じゅわりと染んだショーツの心地悪さに尻をフリフリ、ついにアンジェラは男の股間に口を寄せ。

「ん、ちゅ……」

まるで口付けるように、熱くたぎる膨らみへと己の唇を押しつけた。

「……そう、そのまま好きなように味わいなさい」

忙しくズボンの上を唇が行き来するたび、男が気持ちよさげに眉を下げ、頭をなでてくれる。男にしてみれば、ペットにそうする程度の想いだったのかもしれない。だが、孤

児院を守ろうと必死に張りつめていた一人の女の心を、優しい手つきはやすやすと解きほぐし。父親にあやされるのに近い安心感を覚えながら、アンジェラの心と身体は墮とされる。

やがて、やつと唇がジツパーの先を探り当て、どうにか啜えることに成功した。

「んっ、んふっ、んんうう……」

ジツ、ジジイッ——。

歯先に感じる金属の味。歯茎を剥き出すようなみじめな表情を、男が真っ直ぐに見下ろしている。頭をなでられて、震える股間は新たな蜜を吹き漏らし、先ほど弄られた尻穴はまだ残る熱を吐き出しながらヒクヒクと妖しく蠢き続ける。

（火傷しそうなくらい……熱い……。それに、この……ツンとくる、に、においっ！）
ズボン越しに触れた鼻先が、牡の欲熱に負かされつつ、漂う刺激臭を欲しがって思わずヒクヒクと蠢いた。

——ぶるんっ！

「ひあああうっ！」

やがて、ようやく解放された肉棒に鼻先をぶたれ。同時に染み出した濃厚な牡臭さに、子宮がひとりでにキュンと疼いて胎道を降りてくる。

「さあ、ようやく観察してご覧。これが貴女の見たがっていた、男のペニスですよ」

剥き出した股間の肉棒と、常に慙懃を崩さぬ男の態度。酷くミスマッチに思える光景は、漂う淫靡な空気にぼかさされて、ますます乙女の情欲を引きずり出していった。

「幹はどうなっていますか？」

「んろ……とても硬くて……でも弾力があつて……ふぁ！ 太く浮き出た血管が時々ビクビク脈打つて、ますつ……あつあああ」

口がまた勝手に、浅ましい感想を紡いでいく。やめなければ、と形ばかりの抵抗を心が示すたびに、逆に禁忌への憧ればかりが膨らんで抵抗力を押し潰していった。

「それは、貴女に私が欲情している証拠ですよ。仮面を剥がれて喘ぐその姿。ふふ、本当に素敵だ……！」

べちんっ！

「ひあっ！ んう……おちんちんに、ぶ、ぶたれました……」

今度は頬を横から、丸く膨れた先端でぶたれた。粘り気のある汁が少量、唇に飛び散り附着する。普段なら悲鳴を上げて突き飛ばすであろう男の蛮行が、なぜだか堪らぬくらいに心根を甘く蕩かせてやまない。

（どう、して……ほ、欲しいっ……もつと、もつと臭いお汁が、欲しいっ……！）

ちら、と横目で見た聖堂のマリア像は心なしか哀しい目で、魔性の贄と選ばれた聖女を物言わずただ見つめているようだった。

「んんあはあ……！ はひい、イクうう……！」

いつの間にか傍から離れていった少年少女の支えをなくして、折れた膝先から前のめりに倒れ込む。床の冷たさと所々散った己の愛液の生温かさとが、まだら状になって身に染みる。警告を鳴らし続ける聖痕からの痛苦さえ、ズキズキと甘く膿む悦楽の合図のように感じられてしまう。

「それでは、メインディッシュをいただきましょう。シスターアンジェラ。貴女のいい具合にほぐれたアヌスの初めてを」

わずか数メートル離れたところで三人固まってへたり込んだ■たちが、虚ろな、けれど確実に情欲のこもった瞳で、汗ばんだアンジェラの肌を、牡を求めヒクリヒクリと蠢き続ける股間を見つめていた。

「んうっ……！ や、やあ、そんな優しくう、なでちゃ……んひッ！」

淫魔の手でなでられた尻がひとりでに高々と持ち上がって、牡肉の照準に自ら合わさってしまふ。おぼつかない脚に伝う蜜汁の量が、また一段と増した。床にできた淫水溜まりから漂う甘苦しい香りに、頭の芯まで醗酵してしまふ。

「さあ、■たちの前で貫いてあげよう……ッ！」

ず、ずぶ、ぢゅ……っ！

「あ、が……あおおおおっ！ さけ、ちやああうううう！」

すっかり緩んでしまっていた肛門が、なおギチギチと内側から広げられて張り裂ける。■の指四本組よりふた回りは太い牡の勃起ペニスが、対してあまりに小さい肉穴をメリメリとこじ開けながら突き進んでいく。

息が詰まるほどの圧迫と、己の身体が作り変えられていると自覚せざるを得ないほどの拡張感。■たちの前で、卑しい場所での結合を見せつけてしまっている——。

(だめ、なのおお……だめ、なのがいいっ！)

悲鳴を上げたがる心を裏切つて、股座が嬉し涙の如く蜜汁を漏らす。裂けんばかりに広がった尻肉も、予想以上の伸縮ぶりで牡肉をキュウキュウと締めつけ、互いの股の付け根から上る強烈な肉悦を止め処なく引き出していった。

「マジで、アンジェラのお尻にちんちん入っちゃってる……」

「そ、そんなあ……私のシスターが、男の人に犯されて……んんうう」

凝視する少年少女の指先は、いつしか自然と各々の股間へと伸び、忙しなく寝巻きの内側に潜り込んで蠢き始めていた。

——ずぶぢゅッ！

「ひあんっ！ お、奥まで刺さるうう」

アンジェラの腸肉を挟り込むようにして肉勃起が肛門を突き進む。甘い嬌声が聖堂に響くたび、剛や令菜の指使いもどんどん激しさを増していく。まるで、姉と慕う聖女の恍惚

と一緒に上り詰めようとするように。

「ふ、太い、のおっ……!」

の指などよりずっと奥まで、結腸近くまで貫いてくれる肉棒に、何度も往復されるその都度腸粘膜がミチミチと嫌な音をたてて軋んだ。

なのに。たっぷりの腸液を侵入者にまぶして徐々に馴染ませた肛穴が、牡の味を覚えたてのくせに食欲に締め上げては、粘る先走りを搾り取っていく。

「ふ、ふふ……やはり素敵だ。愛しいアンジェラ……!」

男が身体を倒して体重を預けてきた。異形らしからぬ高めの、昂奮して上がった体温を腰から背中にかけてで余すところなく味わわれる。吐息が耳に吹きかかるたび、牙で耳朶を扱かれるたびに、キュンキュンと子宮が啼く。

「……君たちは、シスターのことが好きかい?」

尻肉を揉みながら、抽送を緩めて。ハズベルは初めて見る痴態に目を凝らす少年少女に向け悠然と問うた。

「お、俺は……絶対大きくなったらアンジェラをお嫁さんにするんだっ」

「だめえっ。シスターは私の、私があっ」

剛の開けっぴろげな告白に、令菜のしどろもどろな追随。

「剛、くんっ、んひう! れ、令菜ちゃ、あんっ! あっあああ!」

■ たちの強い想いを受け入れてやりたい。浮かび上がった情欲と思慕の塊を、後押しするがため。わざとズボズボと大きなストロークで卑猥な音を響かせ、一撃一撃が重たいピストンが肛門を虐めにかかる。

「では、君たちは私のライバルということだな。……そちらの君はどうだい？」
指名された優希はおどおどと、何度か口を開いては言い淀んで、また口を閉じる。アンジェラもついつい見入る中。

「ぼ、僕は……」

優希の視線は、聖女の傍でもじつく、おかつば髪の少女の下へ。

「……そうか」

初恋を秘める少女の如く恥じらう少年の心中を察して、ハズベルの口元に満足めいた、どこか優しげな笑みが浮かんだ。

（優希くん……）

アンジェラは自身が選ばれなかったことを残念に思うと同時に、秘めた彼の愛情が自分が父に抱いていたそれに近い気がして、よけいに恍惚を股間に響かせてしまう。

「おや、またきつくなつて……仕方のないレディだ」

——ばあんっ！

「んひいっ！」

男が言う。その通りだと答える代わりに、トロトロの蜜が子宮からこぼれ、尻穴はますます牡を締めつけて、濃厚な先走り汁を啜っていった。

「■■■■たちの若芽の如き瑞々しさの欲望も、なかなか美味だ……！」

残念ながら少年たちの性欲は、私には食べられないが——そう続けて。淫魔の瞳は喘ぐ黒髪少女の、パジャマの上からでもはつきりわかる濡れた割れ目へと突き刺さる。

「だ、だめ、ですつ、令菜ちゃんはあつ……！ わ、私で満足してッ！」
少女の身を案じての、台詞のはずだった。

「……心配せずとも、一番のご馳走である貴女を差し置いたりしませんよ。愛しのレディ……アンジェラ」

「ひゃああんっ！」

びくんっ！ 耳朶を嘯まれ、なめしやぶられて甘く啼く。新たな刺激を受けてさらにきつく、肛門がギチギチと亀頭の傘下辺りを厳しく締め、男が歓喜の吐息を耳裏に吹きかけてくれる。

（私がい、一番？ ……だめえつ、う、嬉しくなっちゃ……あああああ！）

蕩けていく心の中に、ひと欠片も嫉妬の念が浮かばなかったと、自身の心にはつきりと告げることができないでいる——。

男に心情を見透かされたとことで、加速度的にアンジェラの被虐は煽られていった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>